Duke of Albany とはだれか

——『リア王』の素材と版本史——

磯　田　光　一

『リア王』はケントのつぎの科白ではじまる。

王はコーンウォール公よりオールバニー公を好んでおられると思った。
I thought the king had more affected the Duke of Albany than Cornwall.

しかし，これにつづくグロスターの言葉に出てくる"kingdom"がQ_1とQ_2の両版において"kingdomes"と複雑形になっていて，F_1にいたって現行の単数におちつくという版本史は，『リア王』のプロットのうちに，もう一つの伏線があったのではないかという疑問を起させる。この問題は『リア王』の素材として用いられた先行作品のうち，オールバニー公の位置づけの変容と密接にかかわると思われるので，少し念の入った考察を必要とする。さらにリア王の物語の書き方において，先行諸作品がリアの王位回復をえがいているのに，シェイクスピアがなぜリアの死をえがいたかという問題も，オールバニー公の運命と密接なかかわりを持っているのである。オールバニー公のあつかい方の問題は，『リア王』全体の解釈にもかかわってくると考えられるので，いくぶん迂回の道をたどりながら話をすすめてみたい。

ブリテン王としてのリア王伝説がもともとイギリスに発生したものではなく，ジェフリ・オブ・モンマス『ブリテン王国史』の英訳を通じて広く流布したことはよく知られている。そしてヘンリー七世による修史事業がテューダー王朝の自己正当化とともに，その系図の発生をどう定めて威厳を保つかに向けられたことも広く知られているとおりである。『リチャー

ド三世』については，すでに歴史学者のほうがシェィクスピアの用いた史書の虚構をあばいていて，その一つの到達点としてアリスン・ハナム『リチャード三世とその初期記録者たち：1483—1535』(1975年刊)[1] をあげることができる。こういう歴史学者の仕事は，エリザベス朝の史劇が虚構の上に虚構を重ねたものであることを確定した研究といってよく，シェィクスピアが英国史に取材した作品は，タブル・フィクションとして解読したほうが新しい意味をみいだせるのではないかと思われる。

この場合，われわれはつぎのことに注意しておく必要があろう。すなわちテューダー王朝期に書かれた英国史は，王朝の起源をアーサー王伝説と結びつけ，その発祥の地をウェールズとしていることである[2]。『ヘンリー五世』4幕7場で隊長フルーエリンが主人公のウェールズ生れであることを誇る感情は，ある程度は一般化したものであったと思われる。

このあたりで，シェイクスピアが用いたと思われる先行のリア伝説のなかで，オールバニー公がどうあつかわれているかを見ておかなければなるまい。まず "Albany," という地名については，アーデン版の註に引用されているホリンシェッドの年代記の記述のように，「ハンバー川からケイスネス岬にかけて広がる」土地と考えるのが普通であろう。これはリアの伝説を原話の時点にまで溯行すれば，たしかにそうには違いないのだが，同じホリンシェッドの年代記がオールバニーについて，「いまではその土地の小部分が（大公の支配のもとに）その名を保っていて，残りはスコットランドと呼ばれる」と述べている点に注目しなければならない。事実 "Albany" という語は "Albin," "Albania," とも書かれ，イギリスの北部，具体的にはスコットランドをあらわす詩的な呼び名として一般化していたのである[3]。

リア王の伝説は，その三人の娘との関連が強調されて伝えられ，シェイクスピアが利用できた先行作品においても，三人の娘が表面に強く出ている。しかしコーディーリアを除く二人の娘，具体的にはゴネリルとリーガンが，どういう夫を持つかについてはかなりのバラエティーがある。ホリンシェッドの年代記では，

父はこの答えに満足せず，二人の年長の娘を，一人はコーンウォール公ヘニナスと，もう一人はアルバニア公マグラナスと結婚させた。

The father being nothing content with this answer, married his two eldest daughters, the one unto Henninus the duke of Cornewall, and the other unto Maglanus the duke of Albania.

とあるように，シェイクスピアとは逆に，ゴネリルがコーンウォール公に，リーガンがオールバニー公と結びつく。ジョン・ヒギンズ『統治者の鑑』(*The Mirror for Magistrates*) では，ゴネリルはオールバニー公に，リーガンはキャンブリア（ウェールズ）とコーンウォールを治める公爵に結びつき，シェイクスピアと似た組合せになる。スペンサー『妖精の女王』第二巻第十歌では，ゴネリルがスコットランド王に，リーガンがキャンブリア王（ウェールズ王）に結びつく。つぎにウィリアム・ウォーナーの『アルビオンのイギリス』(*Albion's England*, 1589) では「長女をオールバニー王に，次女をコーンウォール王にあたえた」とあるように，シェイクスピアと同じ組合せになる。さらにシェイクスピアにもっとも多くの素材を提供している無名の劇作家による『リア王年代記』(*The True Chronicle History of King Leir*, 1605) では，ゴネリルがコーンウォール王に嫁し，リーガンはキャンブリア王に嫁し，オールバニー公は登場しない。以上をみると，同じ組合せでも呼称にズレがあったりして，厳密に一致している組合せは『アルビオンのイギリス』だけなのである。

このようなバラエティーの生じた原因は，一つにはホリンシェッドにみられる逆の組合せが，『リア王年代記』にまで影響して混乱を招いているとも考えられるが，しかし，そのほかにもっと大きな原因として，エリザベス女王の死（1603年3月24日）とそれにつづくジェームズ一世（すなわちスコットランド王ジェームズ六世の英国王兼任）の即位が，イングランドとスコットランドとの関係を変えたことが影響していると思われる。

シェイクスピアが直接に用いた『リア王年代記』の刊行は1605年であるが，その書き出しの部分はつぎのようなものであった。

Thus to our griefe the obsequies performd
Of our (too late) deceast and dearest Queen,
Whose soule I hope, possest of heavenly joyes,
Doth ride in triumph 'mongst the Cherubins,;

この "Queen" はリアからみれば王妃であるが，1605年の時点では同時にエリザベスをも意味したことは明白であろう。『リア王年代記』にオールバニー公が登場しないのは，オールバニー公を悪役に仕立てることが，スコットランド出身の新王への侮辱になりかねないという情勢を反映していると思われる。リア伝説の文脈では，父を裏切った二人の娘は夫と共謀するのであって，オールバニー公にそういう役割をあたえる構成はジェームズ一世の時代にはおのずからタブーになっていたのである。

リア伝説の内部の古代ブリテンに関するかぎり，オールバニー公はどういう人物であってもいい。しかし英国史上をみると，オールバニー公はすでに二度あらわれていた。その二度目の出現がスコットランドのヘンリー・ステュアートであって，この称号は子のジェームズ六世（すなわちイングランド王としてのジェームズ一世）に継承されたのである[4]。つまりジェームズ一世は現実のオールバニー公でもあったのだ。こういう現実があるとき，ジェームズ一世の治下では，リア伝説のなかでのオールバニー公は，伝説からはみ出した現実的意味を持ってしまったのである。『リア王』がジェームズ一世の宮廷公演をめざした脚本である以上，オールバニー公のあつかいそのものに，最初から政治的な意味が含まれざるをえなかった。四大悲劇のうちで『ハムレット』を除く三篇は，はっきり新王を意識して書かれているのであり，『マクベス』はスコットランド王の正統性を，刺逆者への罰を通じてえがいた作品である。『オセロー』がジェームズ一世を意識して書かれたことについては，エムリス・ジョーンズの考証があり[5]，キプロス島が舞台になったのは，ジェームズ一世に献上されたノールズ『トルコ史』を利用した結果にほかならない。『リア王』も宮廷公演劇としてみるとき，同じ文脈の延長上にある。開幕した最初に出てくるケ

ントの，

王はコーンウォール公よりオールバニー公を好んでおられると思った。

という科白では，コーンウォールとオールバニーとの逆転は許されなかったのであり，途中でどれほどオールバニー公が不利にみえても，作者は彼を悪役に仕立てないように細心の注意を払っている。『リア王』のプロットは，リアと三人の娘という軸と，グロスターとケントを結びつける軸とで成立しているようにみえるが，もう一つオールバニー公という軸が作品の全体を大きく支配していることに注意しなければならない。『リア王年代記』がゴネリル夫妻とリーガン夫妻の夫婦共謀関係をどうえがいても，それがオールバニー公でなければ問題はなかった。ここでわれわれは，シェイクスピアがオールバニー公をどう創造したかを考えみる必要がある。

オールバニー公は一幕一場に登場したあと一幕四場に出てくる。ここでゴネリルはリアにたいして不満を感じ，リアは早くも怒りを示しているのであるが，オールバニーの態度はいちじるしくひかえめである。リアにたいしては忍耐を求めているだけで，むしろオールバニー公はゴネリルに危惧の念をおぼえはじめているのである。「おまえほど一方的な気持になれない」というのはそのあらわれだが，一幕の二場から四場までがオールバニー公の居城を背景としている点が重要なのである。変装したケントがそこにやってくるだけではなく，リアと道化との出会いもここでおこなわれるからである。Q版ではケントが変装するという指示はないから，観客にはケントと判るように演出されたと思われる。リアとグロスター伯とを結ぶプロット，すなわちリアに好意的な者をめぐるプロットは，すべてここからはじまるといってよく，それをさりげなく守護しているのがオールバニーのように思われるからだ。（その対極にある侵入者が，エドマンドであることはいうまでもない。）

オールバニー公を考える上で興味ぶかいのは，ゴネリルとリーガンとがともにリアを裏切っているのに，その夫どうしをみると，オールバニー公

がリアに好感を持つのに対して，コーンウォール公のほうはリーガンと共謀関係に入るということである。グロスターの目をえぐるのがコーンウォールであれば，その目がとどけられたときに激憤するのがオールバニーである。四幕二場でのゴネリルにたいする強い批判の言葉と彼の正義感とは，『リア王』全体の価値観の代弁者がオールバニー公その人であることを物語っているように思われる。リアを裏切った側の連合軍を指揮するのがエドマンドで，そのうえゴネリルとリーガンの両者がエドマンドを求めているのにたいして，オールバニーは明らかにリアとコーディーリアの側に共感している。リアというヒーローの大きさを別格とすれば，『リ ア 王』の構成はオールバニーの正義とエドマンドの異端性との戦いとして展開しているおもむきがある。

ここでもう一つ考えておく必要があるのは，オールバニーの国家観念と正義との関わりである。コーディーリアがフランス王と結婚し，リアがフランスにのがれ，そのうえフランス軍がリアの側に立ってゴネリルやリーガンらの側の軍隊と戦うならば，正義がフランス軍にあるとしても，国家としてのフランスはイギリスからみて外国にあたる。このへんの問題についてのオールバニーの態度は五幕一場の科白にあらわれている。

聞くところによると，王は娘のコーディーリアのところへ行っている。この国の苛酷な政治に不満を持つ連中と一緒だ。おれは堂々と戦える時にしか勇気が出なかった。今回のことは無視できまい。フランス軍がわが国を侵略しているからだ。正当で立派な理由があってわが国と敵対している王と従者を，フランスが支援していれば話は別であろうが。

Sir, this I hear; the king is come to his daughter,
With others whom the rigour of our state
Forced to cry out. Where I could not be honest,
I never yet was valiant: for this business,
It toucheth us, as France invades our land,
Not bolds the king, with others, whom, I fear,
Most just and heavy causes make oppose.

フランスがリアを支持していないなら，侵略であるから戦う。支持していたとしても，侵略は侵略であろうが，リアとその従者が正当にイギリスと敵対する正義を持つなら，問題は二重の意味を持つ，とオールバニーは述べていると解される。すなわちゴネリルやリーガンにしたところで，それぞれオールバニーとコーンウォールの夫人であり，フランスに対してはイギリス側に属する。しかしイギリスの内部に正義の対立がある以上，イギリスの枠内ではオールバニーはリアとコーディーリアに正義があるとみている。それをフランスが支持するのは妨げないが，イギリスの国土を侵せば侵略であることに変りはない。ここでオールバニーのえらんだ方策は，どこまでもイギリスの側に立ってフランス軍と戦い，リアとコーディーリアを捕えておいて，つぎにイギリスという枠内で正義を実現するということである。もしオールバニーがフランス側についてイギリスと戦ったら，イギリスの国家の独立性がフランスに融解されてしまうのである。

五幕三場にいたって，オールバニーは「失意の王のためには，できるかぎりのお力添えをしたい」といい，リアの存命のあいだは国家の統治権を老王におゆずりする，という。先行のリア伝説にみられるリアの復位をシェイクスピアはここでも踏襲していると思われる。しかしリアの在位でこの作品を終ったとしたら，オールバニー公は次期の王権の候補者たるにとどまるであろう。『リア王』を観るジェームズ一世が，スコットランド王であると同時に現実のオールバニー公でもあったことを考えるとき，作者はこの作品の結末部でオールバニーに事態の収拾をゆだねなければならなかったのである。

ご遺骸をお運びするがいい。われわれの仕事は国中で喪に服することだ。〔ケントとエドガーに〕心の友であるお二人よ，どうかこの国の政治に参画して深傷を負った国を立ち直らせてもらいたい。

Bear them from hence. Our present business
Is general woe. [*To Kent and Edgar*] Friends of my soul, you twain

Rule in this realm, and the gored state sustain.

宮廷公演劇としての『リア王』を考えるとき，この科白がジェームズ一世への賛歌になるのは当然であり，リア王が生きのびるというプロットは宮廷公演の台本としては不可能であったと思わざるをえない。ジェームズ一世を王として認めるためには，リア王はどうしてもこの作品では死ぬ必要があったのである。『リア王』最終行の科白を F_1 によってエドガーの言葉とした版本が多いが，これはQ版によってオールバニーの言葉とするのが正しいと思われる。

シェイクスピアの生涯のうちで，エリザベスの死んだ年は三十代のしめくくりにあたる年であった。『リア王』のエドマンドにみられるように，旧来の安定した秩序を破る動きも見えはじめていた。ピューリタンもその勢力の一つであった。そうであればあるほど，エリザベスの死は一つの栄光の時代の終末としてシェイクスピアに感受されていたにちがいない。『ハムレット』と『マクベス』とが父性にたいする子の反逆の悲劇という風貌を持っているのにたいして，『リア王』は明らかに父性の側が若い世代に裏切られてゆく悲劇である。『リア王年代記』が "Queen" の死からはじまるのにくらべて，シェイクスピアのリアは，すでに王妃を失っている。二幕四場に，

おまえが嬉しくないというなら，おまえの母親の墓から，おれを切離してしまいたいくらいだ。裏切者を墓にほうむっておくようなものだからな。

....if thou shouldst not be glad,
I would divorce me from thy mother's tomb,
Sepulchring an adultress.

これがリーガンにたいする科白である以上，死んだ王妃と娘とはなかば同一視されている。すなわち王妃（女王）の美徳を受けつぐかぎり，娘たちはリアにとって愛するに値いし，娘の裏切りは王妃（女王）の裏切りに

匹敵するものとしてとらえられている。リア王を王権交替劇として読むとき，原話とシェイクスピアの創作時期のイギリスとには，想像以上の類似があった。リア伝説の王権分割の問題は，嫡子のいなかったエリザベス女王の王位継承問題につながっている。むろんスコットランドのジェームズ六世がイングランドの王位をつぐことについては，他に適任者がなかったという消極的な理由のほかに，エリザベスの生前から指名がおこなわれ，国民はこぞって新王をむかえている。それは文字どおり新しい時代のはじまりであった。またそれだからこそ，テューダー王朝の終末は女王への追憶をも人びとの心に生じさせたのである。このとき旧時代への忠誠の心を托そうとするとき，リアの伝説ほど好都合になものがあったであろうか。ゴネリルやリーガンだけでなく，『ヴェニスの商人』のシャイロックのようなエゴイズムも，新しい商業資本として台頭しつつあった。われわれは一方的にリーガンやゴネリルを責めることはできない。古い美徳——コーディーリアのような美徳——から脱皮することなしに，近代が近代でありえたはずはない。こういう新時代のなかで，リアを古い美徳に殉じる敗北者としてえがいたとき，おそらくシェイクスピアはエリザベスの時代にたいするレイクエムを，そしてまた女王へのひそかな忠誠を，そっとリアとコーディーリアの系列のうちに封じこめていたのである。リアの憤怒と敗北とは，旧世代が新世代を前にして敗れていくときのすがたを，普遍的な象徴にまで高めているように思われる。

エリザベスの時代には，イングランドとスコットランドとは複雑な関係にあった。女王メアリー・ステュアートはフランスと結んでイングランドの王位をねらっていたし，メアリはエリザベスを暗殺する陰謀でロンドン塔に送りこまれたのである。そのメアリの子にあたるジェームズ六世が新たにジェームズ一世としてイングランドに君臨したとき，その余波はスコットランドへの見方をも変えるにいたっている。『リア王年代記』に登場しないオールバニー公が『リア王』に登場し，以上にみてきたような役割を示したのも，時勢の必然によるところが少なくはない。スコットランドとの微妙な対立はジェームズがイングランド王を兼ねることによって軽減

し，イギリスは新しい時代に入った。スペインとフランスとの関係の回復も，おのずからスペイン，フランスへの作家の見方に変化をあたえたであろう。

『リア王』のプロットのうちで，オールバニー公とコーンウォール公との対比が，ほとんど問題にされてこなかったのは，リアのイメージの強烈さにもよることながら，宮廷公演劇における政治の制約が目につきにくかったことにもよったのである。テューダー王朝時代の史書がウェールズを起源とする王朝の正統性を意味づける役を持っていたかぎり，それは日本の『神皇正統記』にちかい性質のものであった。だからこそ，史実とシェイクスピアとの関係は，史書を媒介とした二重の虚構にならざるをえない。その二重の虚構の一つを終末にみちびいたのが，いうまでもなくエリザベスの死であり，テューダー王朝の終焉である。

だがテューダー王朝の終焉は，こんどはステュアート王朝の開幕とともに，スコットランドをめぐる“もう一つの虚構”を生んでいる。現存するオールバニー公としての新王の前で演じられた『リア王』が，新王への配慮からオールバニー公を『リア王』全体の蔭の統率者としてえがいているのは，宮廷公演劇の必然の要請であったと思われる。リアが死んでオールバニーがその死をとむらうとき，人びとは新しい王朝の政治的意味を直観したであろう。一身で二つの王朝を生きたシェイクスピアは，旧王エリザベスへのレクイエムを，滅んでゆくリアのすがたへの共感を通じてエリザベスに献じ，リアの死のあとに来るオールバニーの王位のうちに，新時代への祝意を表明したのである。一幕一場のグロスターの科白のうち，Q_1とQ_2とが王国を“kingdomes”と複数にしているのは，イングランドとスコットランドとが独立の国家であり，イギリスの国土分割は複数の国家の再分割として意識されていたからである。フランセス・イエイツのいうように[6]，かつてテューダー王朝の利用したアーサー王伝説をこんどはジェームズ一世が再利用し，ヘンリー七世を通じて自分がアーサー王につながっていると主張したのは，アーサー王伝説の書きかえをも意味したのである。それはシェイクスピアが『ヘンリー八世』を書いて，ふたたびテュー

ダー王朝をあつかう一つの動因にもなったであろう。Q_1とQ_2で複数形をとっていた"kingdomes"は1623年のF_1で単数となる。このときにはイングランドとスコットランドとが分れていても，一つの「王国」という感じになっていたと考えられる。近世イギリスはピューリタンの反乱の予兆をはらみながらも，ともかくも国家としての統一感を持ちはじめたのである。イングランドとスコットランドが正式に統合されるのは次の世紀のはじめ，1707年のことである。

それにしても，以上のような文脈のうちに『リア王』のオールバニー公をとらえるとき，シェイクスピアの歴史劇がいかに政治の現場と密接に関わっていたかに驚かされる。しかしそれ以上に驚かされるのは，オールバニー公をめぐる当時の政治関係が忘れられたのちに『リア王』を読むとき，オールバニー公がリアの蔭にかくれてその意味さえ分りにくいほど作品に融合していることである。『ハムレット』が国家蘇生のドラマであるなら，『リア王』にも同じモティーフがある。だが，ジェームズ一世とオールバニーとの連関を捨象しても，なお，『リア王』は普遍的なドラマとして自立している。歴史の制約のうちに生れた作品が，歴史をこえてしまうということのうちに，王権悲劇としての『リア王』の二面性がある。

注

1) Alison Hanham: *Richard III and his Early Historians: 1483–1535*, 1975, Oxford.
2) 先行研究のほかに最近この問題を興味ぶかく論じたものとしては，渡部昇一「イギリス国学史」(4)(英語青年，1981年　7月号)がある。
3) Harvey: *The Oxford Companion to English Literature* がそのことを記載している。
4) Caroline Bingham: *The Stewart Kingdom of Scotland 1371-1603*, p 208 および*Britanica* の "Albany, Duke of" の項目をみよ。
5) Emrys Jones, '*Othello*, "Lepanto" and Cyprus Wars,' (*Shakespeare Survey*, 21)
6) Frances Yates, *Shakespeare's Last Plays* (藤田実訳，晶文社)